

Ⅷ. 緩和ケアに関する学会などについての情報

5. 日本死の臨床研究会

末永 和之^{*1} 山崎 章郎^{*2}

(^{*1} 山口赤十字病院 緩和ケア科 ^{*2} ケアタウン小平クリニック)

はじめに

日本死の臨床研究会は、死の臨床において患者や家族に対する真の援助の道を全人的立場より研究していくことを目的とし、1977年に創立された研究団体である。毎年の年次大会および総会、会誌『死の臨床』の発行、各種専門委員会の活動、支部活動、教育のための講演会などを開催している。2012年1月現在、会員数2,448名（医師626名、看護職1,430名、その他372名）である。

学会でなく研究会であることの意味は、死の臨床において直面する身体的、精神的、社会的、霊的な苦悩はすべての人に起こり、それを専門的な立場のみでなく、市民とともにあることに基づいているためである。特に、委員会活動を通じて技術面に偏らず、ケアリングのスキルを高め、苦悩ある患者とその家族への寄り添いを学ぶことの活動の概略を示したい。

年次大会

年次大会は年に1回開催されるが、大会テーマのもとに大会長を中心に企画される。この研究会の特徴は、一般演題の発表以外に事例検討を多くし、実際の事例に対して1時間以上の時間をかけて討議する形態をとっていることである。このことにより死の臨床における問題点をさまざまな角度から検討するなど、死の臨床の現場において非常に役立っていると思われる。研究会誌以外に研究会編集の書籍として死の臨床の単行本を発行している。

表1 教育研修ワークショップ開催（2007～2011年）

年度	回	日	開催地	人数	テーマ
2006	第1回		東京	57	死の臨床におけるコミュニケーション
	第2回	11月3日	大阪	41	同上
2007	第1回	7月14・15日	東京	31	同上
	第2回	11月9日	熊本	15	同上
	第3回	3月1日	新潟	31	同上
2008	第1回	8月1・2日	東京	42	同上
	第2回	10月3日	札幌	18	同上
	第3回	3月14日	岡山	19	同上
2009	第1回	7月25・26日	東京	29	同上
	第2回	11月6日	名古屋	18	同上
	第3回	3月13日	盛岡	26	同上
2010	第1回	8月7・8日	東京	29	同上
	第2回	11月5日	盛岡	22	同上
	第3回	3月5日	沖縄	14	同上
2011	第1回	7月3日	東京	16	同上
	第2回	10月8日	幕張	22	同上

委員会活動

① 教育研修委員会

教育研修委員会では毎年3回、「死の臨床におけるコミュニケーション—スピリチュアルケアを目指して」をテーマとした教育研修ワークショップを開催している。ワークショップの一般目標は、「緩和ケアのプロとしてターミナルケアの現場でのコミュニケーションに熟達するために、必要な知識・技能・態度を身につける」である。参加者にはリピーターも多く、そのまま専門的知識・技量を持つファシリテーターとして、活躍される方もいる（表1）。

馬場祥子委員長の報告によると、2011年第2回ワークショップは10月8日（土）にクロス

表2 参加者のアンケート結果

1. 修得度の自己評価 (十分理解できた:1, 理解はできたが応用力は不十分:2, 十分な応用力が得られた:3として点数化)	
1) レポート討論	平均 2.3
2) コミュニケーション演習	
a 傾聴	1.9
b 観察	2.9
c 確認	2.3
d 共感	2.3
3) ロールプレイ	2.3
2. 非常に興味をもった項目 (複数可) レポート討論3名, 演習2名, コミュニケーション(傾聴1名, 観察2名, 確認1名, 共感2名), ロールプレイ10名	
3. 全般的評価 (平均点)	
内容 4.7 (かなり価値あり:4, きわめて価値あり:5)	
内容の難易度 2.6 (やや難しい:2, ほぼ適当:3)	
教育方法としての効果 4.4 (かなり効果的:4, きわめて効果的:5)	
興味に適切か 4.3 (かなり適切:4, きわめて適切:5)	
4. 良かった点 (3名以上の意見) 多職種の参加3名, ファシリテータに関して3名, 気付き4名 (コミュニケーションにより前向きになれる, 確認の重要性, ブロッキング, 自分の内面) など	
5. よろしくなかった点 (2名以上の意見) 時間が短い4名	
6. 自由記載感想 (一部紹介)	
・また参加したい。自分のようなものでも参加できる世界なのだとうれしく思いました。どのように関わられるか探したい。	
・今までの自分の世界からは見えていなかった大切なことに、改めて気づき始めたような感じがします。技術、スピード、データに追いつけられる日々に戻りますが、今までとは違うと思えます。	

ウェブ幕張大研修室において開催された。今回の参加者20名は、医師8名、看護師7名、その他5名とさまざまな職種の方の参加があり、委員も新しい学びを得た。参加者アンケート集計結果は表2の通りである。

ちなみに第3回教育研修ワークショップは2012年3月3日(土曜日)9:30~20:30、札幌市北海道大学医学部学友会館「フラテ」にて開催される。これらの研修にて専門的な人材育成を目指している。

② 国際交流委員会

最近の活動は、グリーフケアについて大会で国際交流広場という形で行われている。

藤井義博委員長報告によると、第34回年次大会における国際交流広場では、9.11事件の遺族として9年間にわたる喪の作業のプロセスを語っていただいたマーフィーさんを囲み、語り合いの場を設けた。第35回年次大会では、3.11の東日本大震災に際し、こころのケアを含めた長期的な支援について考え、語り合う場を設けた。

国際交流広場—喪失と悲嘆に目を向けて—パート1「わたしたち自身のグリーフとグリーフケアに目を向ける」、パート2「今、そしてこれから私たちに何ができるか:グリーフにどう関わり、グリーフケアにどう取り組むか」では、世界各国から寄せられた温かいメッセージをパワーポイントで流して紹介するとともに、基調講演、小グループに分かれての話し合い、話し合った内容の紹介という流れで行った。各グループには、ファシリテーターとして国際交流委員会メンバーが入った。参加者(入場時のアンケート配布数)はパート1が99名、パート2が66名であった。

パート1、パート2を通して、アンケートに答えていただいた80~90%の参加者は、「内容は興味深いものだった」「喪失や悲嘆を今後考えるにあたり役に立ちそうだ」と回答された。何か支援をしたいがどのようにしたらよいのか分からないというジレンマを共有しながら、参加者は震災など危機的な状況になった人たちの思いをシェアできていたのではないかと、日常から脱して、自分にとって何が一番大切なのかを考える機会になったと思われた。

③ 企画委員会

学生のためのホスピス緩和ケアの集いという形で、「真の援助者とは」というテーマで若き医学生にホスピス緩和ケアについて学ぶ機会をもっている(表3)。

小澤竹俊委員長報告によると、2011年は第35回日本死の臨床研究会年次大会において学生のためのホスピス・緩和ケアの集いを開始した。テーマは「真の援助者」である。ワークショップ形式

表3 学生のためのホスピス・緩和ケアの集い
(2007～2011年)

回	年度	開催日	開催地	人数
第1回	2007	2007年12月1日	高知	48
第2回	2008	2008年8月	横浜	63
第3回	2009	2009年8月29日	名古屋	65
第4回	2010	2010年8月28・29日	盛岡	75・30
第5回	2011	2011年8月20日	横浜	52

表4 「死の臨床」原著論文(2007～2011年)

年度	原 著	
2007	1. 浅野未知恵	終末期患者看護におけるトータルペインの理解を促す授業方法の開発
	2. 尾崎勝彦・他	死に関する情報を含む映像が高齢者の情動変化に及ぼす影響—映像に対する関心の高さ、死別体験の影響
2008	1. 安川敬子	日本語版「Collett-Lester 死の恐怖尺度」の因子構造の分析—看護師の死に対する恐怖レベルを把握する尺度の確定
	2. 坂口幸弘・他	ホスピスで家族を亡くした遺族の心残りに関する探索的検討
	3. 多賀裕美・他	協働で行う死後の“入浴ケア(湯灌)が家族のグリーフに及ぼす影響”
	4. 中里和弘・他	死別経験者に向けた小冊子の必要性と項目内容に関する研究—死別経験者の意見と要望を通して
2009	1. 岩本テルヨ	特別養護老人ホームにおけるターミナルケアに関する研究—医療的処置の実態からの検討
	2. 三輪典子・他	がん患者に発症する口内炎に対するインドメタシンパッチの有用性
	3. 荒井春生	がん再発体験者のスピリチュアルニーズの変容
2010	該当者なし	
2011	1. 林 和枝	子どもへのいのちの教育に対する親の態度尺度作成の試み

で討論を行った。技術だけではなく、豊かな人間性も求められることを確認し、そのためにどのような学びを続けていく必要があるのかなど、活発な討論となった。この企画は、来年の年次大会でも継続して行う予定である。

ちなみに、京都において2012年8月に「第6

表5 論文奨励賞(2007～2011年)

年度	論文奨励賞	
2007	1. 浅野未知恵	終末期患者の看護におけるトータルペインの理解を促す授業方法の開発
	2. 前田のぞみ・他	ホスピス緩和ケア病棟における音楽療法の評価についての試み—スピリチュアル・ペインに着目したQOL調査票を用いて
2008	1. 坂口幸弘・他	ホスピスで家族を亡くした遺族の心残りに関する探索的検討
	2. 多賀裕美・他	協働で行う死後の“入浴ケア”(湯灌)が家族のグリーフに及ぼす影響
2009	1. 岩本テルヨ	特別養護老人ホームにおけるターミナルケアに関する研究—医療的処置の実態からの検討
	2. 三輪典子・他	がん患者に発症する口内炎に対するインドメタシンパッチの有用性
2010	1. 石井京子	特別養護老人ホームにおける終末期ケア行動に関する研究—看護師とケアワーカーの役割認知と実践の比較
	2. 倉林しのぶ	子どもをもつ若年層寡婦のストレスおよび自治体におけるサポートの現状
2011	1. 清原恵美・他	地域における緩和ケア病棟の役割—緩和ケア病棟における地域の看護師を対象とした研修の評価
	2. 西脇可織・他	終末期がん患者の看護に携わる看護師の学習ニーズと経験年数およびケアの困難度の関連

回学生のためのホスピス緩和ケアの集い」を企画した。臨床の第1線の現場で活躍するエキスパートと、これから社会に出る学生との出逢いを通して、将来の死の臨床の人材を開拓していく予定である。

会期：2012年8月25日午後

会場：京都市内(京都大学を予定)

内容：講演 細井順(13:00～14:00)、分科会(14:30～16:00)、全体会(16:00～17:00)

④ 編集委員会

編集委員会は、研究会誌『死の臨床』での原著論文の査読、掲載を行う。『死の臨床』掲載の原

表6 研究助成 (2007～2011年)

年度	研究助成	
2007	1. 的場和子	ビハラーで最期を迎えることの価値はどこにあるとひとびとは考えているか
	2. 植田喜久子	「身の置き所のない」倦怠感がある終末期がん患者の様相とそれに対する緩和ケア
2008	1. 佐藤貴之	エンバーミング（遺体衛生保全）の意思決定が遺族の悲嘆に与える影響に関する社会心理学的研究—意思決定を巡る当事者間相互作用に焦点をあてて
2009	1. 山手美和	乳がん患者の治療を継続していく力—家族からのサポートの側面に焦点をあてて
	2. 赤澤正人	若年者の自殺関連行動と死生観に関する研究
	3. 永崎栄次郎	終末期がん患者の疲労とサイトカインの関連の研究
2010	1. 荒井春生	がん終末期の統合失調症患者を看取る精神科看護師の戸惑いと希望
	2. 石川美智	特別養護老人ホーム施設職員の死亡診断時におけるケアの実態調査
	3. 佐藤恭子	主治医と患者・家族における「予後認識のずれ」についての研究
2011	1. 村瀬正光	わが国の緩和ケア病棟における宗教家の活動の現状
	2. 樋口隆太郎	故人との絆の継続が死別後の適応に与える影響—絆の継続に焦点をあてて

著論文を示す(表4)。また、原著論文より論文奨励賞を2件に贈り、研究を押し進めている(表5)。さらに、毎年研究助成を公募し、教育・研究助成を行っている(表6)。

このように死の臨床における専門的な立場から研究が広く行われ、実践の場で役立つように活動を推し進めている。

⑤ あり方特別委員会

日本死の臨床研究会の35年の歴史の中で、当初は臨床で「死」と正面から向き合うことが、社会から受け入れられがたいものであったが、現在は「ホスピス緩和ケア」領域の学会・研究会が多数設立されるようになった。そうした中において、本研究会の存在意義やあり方について、会員の理解を深め伝統を守りつつも、時代の要請に応えられるような活動が求められている。

そこで、本研究会のあり方についてより具体的に、中心となって提案できる体制をつくることを目的として、2010年10月に医師・宗教家・医療ソーシャルワーカー(MSW)・看護師の多職種からなる「日本死の臨床研究会ありかた特別委員会」が発足した。まず、手始めに会員の意識調査を行い、日本死の臨床研究会が真の援助者となるために当研究会の進むべき方向性について検討することとなっている。

このように、日本死の臨床研究会は個人の専門家の資格よりも幅広く真の全人的な援助の普及、育成を行うことを目的として活動している。